

雷鳴のようにな——時代と無意識 あとがきにかえて

小林康夫

「われわれの関わっている分野では、認識は稲妻の閃光のようなものでしかない。テキストは稲妻の後から長く続く雷鳴である」^①——と『パサージュ論』のある断片にヴァルター・ベンヤミンは書いていた。確かにベンヤミンの歴史についての認識はまさに「稲妻としての認識」であった。その「稲妻」の一瞬の閃光のあとで、雷鳴はまだ長くながく轟き続けている。しかも、それはもはやヨーロッパにとどまらず、アジアや南米の岸边までを震わせながら、ますます激しく鳴りやまない。

○七年六月、まだ第Ⅱ期UTC Pも正式に発足していなかったときに、わたしは中島隆博さんとともに、ニューヨーク大学の張旭東さんのお誘いを受けて、『パサージュ論』中国訳を契機に行われた上海の華東師範大学で行われたベンヤミンについての国際セミナーに参加した。

① ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論Ⅳ——方法としてのユートピア』（今村仁司ほか訳、岩波書店、一九九三年、五頁）。

ヨーロッパであれ、アジアであれ、この時代にあつて、「時代」を問おうとするならば、やはり夢と覚醒のあいだの「弁証法」を通して「時代」を突き抜けようとしたベンヤミンの思考の努力と向かい合わないわけにはいかない。わたし自身〇七年秋よりU T C Pの活動の一環として「時代と無意識」と大きくまとめたセミナーを主宰してドゥルーズ、フーコー、ニーチェ、ハイデガー、デリダ、等々の思考を論じつつさまざまな方と対話をしてきたが、そうした活動もつねにヴァルター・ベンヤミンのほうに向かっていっていると感じていた。

そうしたら、東京都現代美術館で個展を準備中の旧友の川俣正さんから、「通路」と題されたその個展会場内で「なにかセミナーをやりませんか？」というお誘い。「通路」ならばやはり「パサージュ」——これはベンヤミンについてのセミナーという暗合だろうと逡巡なくお引き受けして、U T C P研究員の森田團さんと第I期の研究員だった竹峰義和さんをお願いして「パサージュ」をめぐる発表をお願いした。非常の場所でのセミナーは川俣さんご自身も来てくださって、わたしとの対話につきあってくださり、なかなか充実したものだったので、これを今期より開始したU T C Pブックレットの一冊として急遽、編集することにした。

それを決めたあとで分かったことだが、われわれが呼び出したアルゼンチンのフランシスコ・ナイシュタットさんのレクチャーもなんとベンヤミンを巡って、しかも同時期にお呼びしたトム・コーエンさんの講演も、ベンヤミンに直接触れていたわけではないが、そのタイトルは「ベンヤミン風の序章」となっていた。ナイシュタットさんの講演をただちに西山雄二さんに訳してもらってここに追加することにした。

このように、このブックレットは最初に編集があつて本が出来たのではない。U T C Pの今年度の流れのひとつがおのずから形をとってまとまったということである。ヴァルター・ベンヤミンの思考が現代の問いのひとつの共通の地盤をなしているということであり、そのことをここに記録しておきたいのだ。アルゼン

チンからUSA、日本そして中国とこの惑星をぐるっとまわるようにかれの「稲妻の思考」が雷鳴を轟かせている——わがヴァルターは、びっくりしながらも、きつと喜んでいるだろうとわたしは確信している。

二〇〇八年三月三日

著者紹介

川俣正 (かわまた・ただし)

1953年生まれ。美術家、パリ国立高等芸術学校教授。第40回ヴェネツィア・ビエンナーレ(1982年)、ドクメンタ8(1987年)、第4回上海ビエンナーレ、釜山ビエンナーレ(2002年)などに参加。2005年横浜トリエンナーレ総合ディレクター。著書に『オン・ザ・ウェイ——川俣正のアーティストな旅』(角川学芸出版、2008年)、『アートレス——マイノリティとしての現代美術』(フィルムアート社、増補改訂新版、2001年)ほか。

小林康夫 (こばやし・やすお)

1950年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学教授。著書に *La cœur / la mort: De l'anachronisme de l'être* (UTCP、2007年)、『表象の光学』(2003年、未来社)、『起源と根源——カフカ・ベンヤミン・ハイデガー』(未来社、1991年)ほか。

森田團 (もりた・だん)

1967年生まれ。東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」研究拠点形成特任研究員。論文に「哲学」における「過去」と「未来」——「いま、哲学とはなにか」という問いについての予備的考察(『いま、哲学とはなにか』小林康夫編、未来社、2006年)、「封印する／される暴力——ヴァルター・ベンヤミンにおける「神的暴力」の概念と時間性的問題(『UTCP研究論集』Vol. 10., 2007)、「仮面をつけた現実——フロイト「不気味なもの」のイメージ論的読解の試み」(『SITE ZERO』no. 0., 2006)ほか。

フランシスコ・ナイシュタット (Francisco Naishtat)

ブエノスアイレス大学教授、国際哲学コレージュ(フランス)・ディレクター。著書に *Problemas filosóficos en la acción individual y colectiva* (Prometeo, 2005)、*Tomar la palabra* (Prometeo, 2005)。

中島隆博 (なかじま・たかひろ)

1964年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学准教授。著書に『残響の中国哲学——言語と政治』(東京大学出版会、2007年)、*The Chinese Turn in Philosophy* (UTCP、2007年)ほか。

西山雄二 (にしやま・ゆうじ)

1971年生まれ。東京大学総合文化研究科特任講師。著書に『異議申し立てとしての文学——モリス・ブランショにおける孤独、友愛、共同性』(御茶ノ水書房、2007年)。

竹峰義和 (たけみね・よしかず)

1974年生まれ。武蔵大学ほか非常勤講師。著書に『アドルノ、複製技術へのまなざし』(青弓社、2007年)、『美のポリティックス』(共著、御茶ノ水書房、2003年)。

〈時代〉の通路

ヴァルター・ベンヤミンの「いま」

小林康夫 編

2008年3月19日発行

発行人 —— 小林康夫

発行所 —— 東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」

The University of Tokyo Center for Philosophy (UTCP)

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

編集人 —— 前田晃一・UTCP

装幀 —— 平倉圭

印刷・製本 —— ディグ

〒104-0043 東京都中央区湊2-8-7

Copyright © 2008 by UTCP

ISSN 1882-742X

Printed in Japan